

# 平和特派員の報告

---

平和特派員が作成したレポートをご紹介します

# 核の無い平和な世界へ

いわさき ねね  
岩崎 寧々(中学3年生)



今回の平和学習に参加し、私が特に印象に残っているのは、被爆者の方のお話です。

被爆者の方が、原子爆弾が落とされた後に暗くて何も見えない中、手足の感覚を頼りにがれきの山から脱出した経験、友達と協力して必死に逃げ回ったというお話、その途中で丸こげになった赤ちゃんを抱き、その赤ちゃんの名前を呼びながら歩き回っているお母さんの姿を見たというお話や、水を求めてくる人に水をあげたくてもあげられないという苦悩、そして原爆投下から時間がたった後も、いつ自分が被爆によって病気を発生してしまうのかという恐怖があったというお話を伺いました。

原子爆弾が落とされた時も、その後もどれだけ被爆によって苦しめられていたのか、と思うと胸が潰れる思いでした。実際にこの日本で78年前にこんなことが起きていたとは。自分の想像をはるかに絶するものすごく大きな衝撃を受けました。

また、被爆者の方は私たちに向けて、これらの体験談だけではなく、次のようなメッセージをくださったことも忘れられません。

生きたくても生きられずに戦争で命を落とした人がいる一方で、現代では自ら命を絶ってしまう人が後をたたない、それはとても悲しいことでありもっと自分の命を大切にしてほしいと。

現在も世界では戦争はなくなり悲しく辛い思いをしている方々がたくさんおられます。また、原子爆弾もいつ使われてもおかしくないという状況にあります。

なぜ武力による争いは無くならないのか、互いに傷つけ合い、その家族や周囲にも大きな悲しみをもたらす戦争にどれだけの意味があるのか。そこまでして自己の利益を追及し得られる物は何なのか、それよりも一つ一つの命を守るの方がはるかに大切なのでは無いでしょうか。戦争の問題は背景に複雑な事が絡み合い、これを解決するのは決して容易な事では無いとは思いますが。

しかし、私はお互いに多様性を認め合い、対話によって平和的な解決を模索し続けていくことが必要と考えます。そのために私は普段から、色々な経験をつみ、人と接する中であらゆる視点を持ち、正しく広く考えて、お互いを理解し合うことを意識して生活することを心がけたいと思います。被爆者の方から直接お話を伺えたこの機会に感謝し、今回得たこと、考えたことを広く周囲に伝えていかねばと責任を感じました。

1人の力はわずかですが、少しずつでもそういった意識が周囲に芽生えることで、やがてより多くの人に広がり、平和な世界の実現へとつながる事を強く願っています。

# 原爆の日に広島を訪れて

くりき さや  
栗木 小斐(中学1年生)



私は、今回広島に行って思ったことがいくつかあります。それは、今の生活が戦時中に比べてあまりにも平和だということです。そう思ったのは、8月5日に行った平和記念資料館でした。

当時自分と同じくらいの年齢の子が、当たり前のように工場へ働きに出たり、建物疎開に駆り出されたり、学校の授業の一部では男子は銃剣術などの武道を、女子は薙刀や看護などの訓練が取り入れられていました。

1945年8月6日もいつもと変わらない日でした。被爆したときの服や遺品を見てみると、服は布で修復されていたり、靴のサイズが小さかったり、中敷きのところが何重にも重なっているものが。その遺品たちを見ていると私はとても虚しい気持ちになりました。

自分はよくわがまを言います。けれど戦時中の子どもたちは、毎日を過ごせるか不安になって怯えていました。そのことを考えると、自分の中の後ろめたさと申し訳無さが、湧き上がってきます。自分と同じくらいの年齢の子たちが、建物疎開など今では考えられないようなことをして、大変な思いをしてきたのだと思いました。

「平和とは」ということをこの作文で改めて考えたとき、私は8月6日の平和記念式典で広島市にある小学校の6年生が、読み上げていた平和への誓いが、脳裏に浮かびました。

日常にある平和は、悪口を言わないことや喧嘩をしないことであり、世界の中での争いや戦争がないことではないかと、平和への誓いにありました。私も、そうだと思います。

平和記念式典に関連付けて、驚いたことがありました。それは、平和記念式典中にあった戦争に関する拡声器のデモの声について、アンケートがあったことです。

もう一つ思ったことは、広島が東京からとても遠いことです。

東京駅から広島駅まで新幹線で行くとほぼ4時間もかかります。日本という同じ国のはずなのに、東京駅から広島駅までの時間が長くて驚きました。そのくらい遠いということに驚くとともに、遠く離れていることで、私のように広島や原爆のことをよく知らない人はたくさんいると思います。日本に住んでいても行ってみないとわからないことがあると思いました。

私は、小学校低学年や中学年のころ、戦争に対してあまり興味がありませんでした。しかし、5年生の頃に学校にあった『はだしのゲン』を読んで戦争に対して興味を持ちました。だから、今回学んだことを平和特派員として、同じ学校の人など同世代の人たちに対して知ってもらいたいと思いました。

# 広島爆心地レポート

こ いしえん  
顧 弈煊(中学1年生)



1945年8月6日、広島へ原爆が投下された。当時の広島市の人口は、35万人であったが、14万人の命を奪った。中学1年生以上の生徒が建物疎開作業に動員され、このうち7,200人の方が亡くなった。原爆の犠牲によりいまだに引き取り手のない遺骨は7万人ほどいるという。

原爆の原理は、プルトニウム原子などの原子核に中性子をあて、人工的に壊すと、大量のエネルギーが放出され、この核分裂を利用した兵器が原子爆弾である。

広島原爆のさく裂後に発生した火球の表面温度は、約0.2秒後にはセ氏7,700度に達し、放出された熱線は、さく裂後0.2秒から3秒までの間に、地上に強い影響を与えた。爆心地周辺の地表面の温度はセ氏3,000から4,000度にも達し、爆心地から半径3.5キロメートルまでの地域にいた人も火傷を負った。特に、約1.2キロメートル以内で、さえぎるものがないまま熱線の直射を受けた人は体の内部組織にまで大きな障害を受け、そのほとんどが即死、または数日のうちに死亡したとされている。

被爆の影響は恐ろしい。

爆心地から1,500メートル離れた自宅にいた吉川清さんは、被爆により背中と両腕の皮膚は焼けただけ、垂れ下がった。その後、火傷のあとはケロイドとなり激しい痛みを伴ったという。

また、母親のお腹の中で被爆した人もいる。「原爆小頭症」といい、妊娠初期の胎児が大量の放射線を浴びることで引き起こされる。頭囲が小さく、知能や身体に障害を伴って生まれる場合があるされている。放射線は、原子核が壊れる時に発生する高速で動く粒子や大きなエネルギーを持った電磁波であり、物質を通り抜ける性質がある。

また、原爆は爆発により巨大な力をもった衝撃波も発生させた。衝撃波と爆風によって、爆心地から半径2キロメートルまでの地域では、ほとんどの建物が破壊された。崩壊しなかった建物でも、窓は全部吹き飛ばされ、無数のガラスの破片と化した。

# 核抑止論ではなく核廃絶を！

ちかみ ゆい  
近見 優衣(中学2年生)



“核兵器はこの世にいらない！”

1番心に残った場所は本川小学校平和資料館です。ここは広島市内にある被爆した小学校です。本川小学校平和資料館の地下に降りてみると実際に被爆して真っ黒に焦げた壁がありました。電熱器のコードが全て切れて爆弾のかけらで壁がえぐれていました。そこは真っ暗で音もなく、その異様な雰囲気がとても怖かったです。

また、被爆翌年の小学校の写真を見ると、松葉杖をついた先生が授業をしていました。生徒も先生も服がボロボロで机や椅子の数も明らかに足りていませんでした。本川小学校で被災をした410人のうち生き残ったのは女子小学生1人と教員1人だった事を知り驚きました。何も罪のない子供たちがたくさん亡くなり戦争は無慈悲だと痛感しました。

原爆ドームは近くで見ると真っ黒で脆かったです。東京で戦争について学んでいたときは本や資料から戦争の悲劇を想像していただけでしたが、原爆ドームの建ち様から原爆の残酷さがとてもよくわかりました。

平和記念公園には韓国人慰霊碑がありました。ガイドさんの話では広島原爆で亡くなったのは日本人だけでなく、捕虜になっていたアメリカ人やアジア人もいたそうです。原爆は人種や性別も関係なく全ての人の命を一瞬で奪ってしまうことに衝撃を受けました。

子どもの集いでは被爆者のお話を聞きました。彼女は中学生の時に作業所で被爆し、多くの同級生の遺体運んだと話していました。生きてくても生きられなかった学生達が多かったことがわかり、胸が痛みました。最後に「自分の命を大切にしてください」と語っていたのがとても心に残りました。

広島平和記念資料館では死の斑点が出ている人や火傷をした人々の写真、生き残った人々の証言が多くありました。たった一発の原子爆弾で広島の人々が長く苦しみ続けたことがわかり非常に胸が痛みました。

広島平和記念式典に参列した時には、核抑止論ではなく、核廃絶の道を切り開いていくべきだという広島県知事の強い憤りを感じました。

原爆ドーム前にある元安川は原爆が落とされた時、沢山の人々が飛び込み、そこで亡くなりました。その元安川で、私たちは灯籠流しをしました。平和への願いを書いた灯籠が川を流れていくのを見て、広島は原爆の悲劇から復興し、平和になったと思いました。

しかし、平和記念公園では沢山の団体や宗教が核廃絶への大規模なデモ行進をしていて広島もまだ平和の道半ばであると実感しました。まだ世界には12,500発もの核兵器があります。

広島で被爆の実態を見てどんなことがあっても核廃絶を成し遂げなければならないと強く思いました。だからこそ、私たちは核抑止論ではなく、核廃絶を強く訴え続けていくことが大切だと思います。

# 平和を保ち続ける努力を

ながい ゆきこ  
永井 悠希子(中学3年生)



ロシアによるウクライナ侵攻、核兵器の使用をちらつかせるプーチン大統領、それに呼応するように国防費を増強する国々…平和なはずの日本に住んでいる私でも何となく不安になるような社会情勢のなか、私は文京区平和特派員として被爆地ヒロシマを訪れた。

初日の8月5日は、原爆資料館と平和記念公園を見学。実は今年5月の修学旅行で一度見学してはいたのだが、その時は怖くて直視できなかった被爆者の痛ましい写真の数々も「私は平和特派員なんだ」という責任感を持って、しっかり見学し、改めて原爆の惨さを実感した。翌8月6日、78年前と同じように快晴の朝、前日資料館で見た黒焦げの弁当箱やボロボロにちぎれた衣服、ゆがんだ三輪車の持ち主たちの苦しみに思いを馳せながら平和記念式典に参列した。驚いたのは参列者の数だ。外国人も多い。100ヶ国以上の国の人々が参列していることを知り、こんなにたくさんの人々が平和を望んでいるという事実にあ堵しながらも、それなのになぜ戦争はなくなるのか？なぜ核兵器はなくなるのか？という矛盾も感じた。

最も印象に残ったのは、式典のあと拝聴した梶本さんの被爆体験のお話だ。満州事変の年に生まれて、今の私と同じ15歳の時に被爆したという梶本さんの体験談は聞いているだけで辛く、凄惨なお話だった。自分自身も大けがを負っているなかで、たくさんの死体を越えながら荒れ果てた街をさまよい歩き、焼けただれた姿で水を求める人々に戸惑ったことを「人間の心をなくした」体験として切々と語ってくださった梶本さん。もし私が梶本さんだったら、こんな辛い体験は一日も早く忘れたい。すっかり忘れて何も話したくないと思うのではないかと考えると、感謝の気持ちでいっぱいになる。梶本さんのお話の内容とともに、平和を愛するあの優しく強いまなざしを私は決して忘れないと思う。

最後に梶本さんはこう仰った。

「戦争は忘れた頃にやってくる。忘れられた戦争は繰り返される。これからの日本が平和を保ち続けることができるかどうかは自分たち次第。知恵を出して、行動を起こしてください。」

私にできることは何だろう。今すぐにはできることは、今回の経験を家族や友達に話し、平和について語り合うことだ。今起きている諸問題について、常に興味を持ち、多面的に深く考えようと意識することも大切だろう。平和な未来はただ待っているだけではやってこないということを心に刻み、平和を保つための努力を怠らない人間でありたいと思った。

# 核兵器のない平和な未来へ

ながた れいじ  
長田 怜士(中学2年生)



私はこの夏に文京区の初代平和特派員になることができました。春に募集記事を見た頃は、連日ニュースで日本から遠く離れている国々での戦争の悲惨な映像が流れていて、きちんと平和について学んでみようと思いチャレンジすることにしました。一次選考の作文は、中学受験の社会の勉強で核保有国が多く、その国々が保有している数に驚き、また恐ろしくなったこと、使わせてはいけなことを書きました。二次の面接は、緊張しましたが質問に対して自分なりにがんばって応えることはできたと思います。無事に合格の手紙がきた時はとてもうれしかったのを覚えています。

平和特派員として、最初の活動は広島より譲りうけた被爆樹木二世アオギリの苗木の植樹式でした。この苗木が無事に大きく成長して文京区の平和のシンボルになってほしいです。

8月に入りいろいろな中学校の平和特派員メンバーと、平和記念式典、ひろしま子ども平和の集い、意見交換会など平和学習へ参加するために広島へ向かいました。

広島駅に到着してから平和公園へ行き、今は整備されている綺麗な公園ですが、以前は賑やかな街で人々の生活、暮らしがあったとボランティアガイドさんからお話がありました。

爆心地にとっても近い原爆ドームも教科書でみるよりとても大きかったです、残っている一部の中は崩れて黒く焦げているのが見えました。

平和記念資料館では8月6日に広島に何が起きたのか被爆者の遺品や被爆の惨状を示す沢山の写真が展示されていました。大火傷により皮膚が垂れてしまっている人、自分と同じ中学生の遺品でボロボロに溶けている制服…小学生の時に調べて学習したこともあり、写真は見たことがありましたが、目の前で実物をみていると自分もその状況にいたかのようにも感じられ、胸が苦しく悲しくなりました。

また、被爆前後の広島の市街地の焦土と化した立体模型がありました。旧中島本通り、現在の平和記念公園周辺は沢山の家や建物がびっしり並んでいました。投下後は廃墟となり、全て燃え尽きていました。一瞬にして人々の生活奪った原爆の恐ろしさが改めて伝わりました。

次の日の平和記念式典では、文京区の代表という気持ちを持ち、早朝から緊張しながらも参列しました。沢山の国々から大勢の人が参列していたので関心の高さに驚きました。

ひろしま子ども平和の集いでは、全国の中高生の平和への取り組みを聞くことができました。他の学校での取り組みは素晴らしく、自分では思いつかないようなものが沢山ありました。また、英語が好きなのでユースピースボランティアがとても印象に残りました。

今回は広島へ行き被爆者のお話も直接聞く事ができました。高齢の方が多く、これからは私たちがヒロシマに起きた惨状を伝え続け、二度と核を使わせてはいけないと強く思いました。

今後、英語でスピーチもできたらより多くの国々の人々にも伝わると思うので、もっと勉強して、いつか文京区から世界へ平和への願いや広島のことを発信できたらと思います。

# 人類の平和と繁栄のために

はやし し ゆう  
林 志優(中学 2 年生)



## 1. はじめに

文京区平和特派員として広島に派遣され、常に平和を考え続けた 3 日間を過ごした。本事業に参加するきっかけとなった東京で、戦争のことをおぼろげに捉えるのではなく、はっきり実体を持った戦争の悲惨さを体験することができた 3 日間であった。

## 2. 原爆ドーム、広島平和記念資料館

1 日目に原爆ドームに行ったが、爆弾 1 発でこれ程まで破壊されたことに衝撃を受けた。ガイドの話を知ると、爆発直後、地上は 3,000 度にもなったという。また、爆風も 1 m<sup>2</sup>当たり 11t だ。そんな強さの爆風が上空から降り注いだ。人は即死、丈夫な建物でさえ高温な熱波と爆風で一瞬にしてつぶれた。この話を聞いた時、とても残酷だと思った。

広島平和記念資料館では、その悲惨さを写真や映像として学ぶことができた。原爆にさらされた服は燃えてぼろぼろになり、煉瓦さえも変色してしまう。熱波や爆風からの即死を免れた人達に、放射線の脅威が容赦なく降り注いだ。放射線の中でも特にγ線は地上に残留し、広島の惨事を聞いた人達が、家族を探すために来た時、γ線が人々の体内に取り込まれた。この放射線は後に白血病やがんの原因となってしまう。このように、人類は発明したものを正しく利用せず、人を殺す兵器に利用してしまったのだ。

## 3. 平和記念式典、本川小学校平和資料館

2 日目は、平和記念式典に参加した。式典には数えられない程の人がおり、国や県、世界の重要な人物の言葉を聞く事が出来た。広島は、この式典の事は忘れられないだろう。

本川小学校は爆心地から 410m にあり、原爆にさらされた建物内部の状態を当時のまま残している貴重な資料館で、実際に中に入って間近で見られたことが大きかった。建物内部の壁も原爆の熱波により焼けており、窓の周りは爆風で跡形もなかった。原爆の衝撃の大きさを理解できた。

## 4. まとめ

原爆は 14 万人を殺した凶悪な兵器である。核兵器は廃絶しなければならないが、未達成な難しい国際問題である。核兵器を作り、他国とのパワーバランスを作って安定する国ではなく、各国で対話し、核兵器がなくとも、人々が安心して暮らせる世の中を作っていかなければならないと心から思った。今後学んだ経験を活かし、原爆の危険さを沢山のの人に共有して、身近な所から平和の輪を広げていきたい。

## 5. 謝辞

本事業を通じて、今までの固定観念が崩れて、新しい考えを持つことができた。ただ核が危険というだけでなく、今までの人類の歴史からも考察すること、また、広島で平和について深く考えることができた。これは一生忘れられない程、強烈な経験だった。本事業を企画し、選んで下さった文京区総務課の職員の方々、広島でお世話になった関係者の方々にとっても感謝している。ありがとうございました。

# 平和特派員として学んだこと

はやし 林 莉央(中学1年生)



私が今回この事業に参加したきっかけは、今年5月にG7サミットが広島で開催され、世界で唯一の被爆国である日本の中学生として、何かできることをしたかったからです。そのためには、まず原子爆弾や戦争についてよく知ることから始めようと思い、募集ポスターを見て応募しました。

今回訪れた場所で特に驚き、記憶に残ったところは3つあります。

1つ目は、平和記念公園内にある広島平和都市記念碑の石室です。原爆によって亡くなり、身元がわかっていない方の骨が入っています。原爆投下から78年たった今でも身元がわかっていない骨が多くあること、毎年、原爆死没者名簿に新たな名前が載ることは初めて知りました。

2つ目は、平和記念資料館に展示されていた中学生の遺品です。原子爆弾によって、大人だけではなく、たくさんの子供の命が奪われたことは以前から知っていましたが、子供が建物疎開の手伝いをしていたことに衝撃を受けました。手伝いに行くために持って行っていた昼食用のお弁当や制服、ゲートルなど、劣化した様子がわかり、現在も残っていることに驚きました。

3つ目は、全国各地にとどまらず、世界中から集められた千羽鶴です。広島市では千羽鶴の再生紙を卒業証書に使用していることで、原子爆弾の恐ろしさを次の世代も伝えていく、そんな思いを感じました。更に、テレビや教科書の写真などでよく見ていた原爆ドームを実際に自分の目で見た時、その迫力にとっても驚きました。それと同時に、原子爆弾の威力の凄まじさも伝わってきました。

最後に、広島に行く機会を与えてくださり、施設を見学したり、式典に出席したりと、貴重な体験をさせていただいた文京区平和事業担当の皆様、被爆者として講話をしてくださった方、ツアーの説明をしてくださった方、その他にも3日間活動を支えてくださった皆様、ありがとうございました。核兵器が不要な世の中にしていくため、日本の中学生としてできることをしていきます。

# 伝えていくことの大切さ

ふくち めい  
福知 芽衣(中学3年生)



「生きてほしい」

被爆者の梶本淑子さんは私たち中高生にそう語りました。

1945年、昭和20年8月6日8時15分、快晴の広島で突然原爆が投下されました。原爆は上空約600mで炸裂し、人々に爆風、熱線、放射線を浴びせました。その年の年末までに約14万人が亡くなったと推定されています。文京区の人口は約23万人であるため、区民の半分以上が亡くなることに相当します。

私は広島への派遣事業を通して、主に2つのことを学びました。

1つ目は「原爆の悲惨さについて」です。1日目は平和記念公園で広島市観光ボランティアガイドの方による説明を聞きました。そこで衝撃を受けたのは、横浜、東京湾などの18か所が原爆投下の候補地となっていたことです。もし日本が降伏しなかったら、他の候補地にも原爆が投下される恐れがありました。

今、当たり前のように暮らしている東京も放射能にさらされていたかもしれない考えると恐ろしいです。

ガイドツアーでは、原爆ドームも訪れました。原爆ドームは「同じ過ちを二度と繰り返さない」という強い願いから、負の遺産として世界遺産に登録されました。1966年に永久保存が決まってから何度も工事をし、被爆当時の状態に近いまま保存されています。

その後訪れた平和記念資料館では、目を背けたくなるほど悲惨な資料を含め、被爆者の遺品などが展示されていました。中には中学生で被爆して亡くなった方の遺品も展示されており、改めて原爆の悲惨さを感じました。

2つ目は「平和の尊さについて」です。2日目には平和記念式典に参列しました。印象に残ったのは、子ども代表の「平和への誓い」です。「生き残ってくれてありがとう。」という言葉が胸に刺さりました。私たちの生活は、命を繋いでくれた人がいるからこそ成り立っていると実感しました。

ひろしま子ども平和の集いでは、被爆者の梶本さんのお話を聞きました。梶本さんの言葉により私は、これまでよりも一瞬一瞬を大切に生きようと心に決めました。

また、ひろしま子ども平和の集いでは、中高生が行う平和の取組発表も聞きました。中高生が平和の啓発のために尽力していることを知り、私もこれから原爆のことを伝えていきたいと思いました。

以上2つのことを広島で学び、これから原爆について主体となって周りに普及させていきたいと思いました。

私は10月に修学旅行で長崎に行き平和学習をします。そこで、同じ原爆投下地である広島と長崎を比べ、それをクラスメイトなどに伝え広げていきたいと思います。

被爆者の数は年々減少し、平均年齢も約80歳となりました。これから、被爆者がいなくなり、私たち若者が原爆について伝えていく番になります。広島を訪れ、被爆者の方の講演を聞いたという貴重な経験を無駄にしないよう、これからも平和の啓発に努めていきます。

# 私たちからスマイルの 花を広げるために

みぞぐち かな  
溝口 奏(中学1年生)



8月5日、6日、文京区平和特派員として広島を訪れて平和について学びました。この文京区平和特派員活動の報告書で、私は、広島で気づかされたこと、未来の平和に向けて考えたことについて書きたいと思います。

平和記念公園で、ガイドの方に案内してもらった中で、「原爆ドームは、もともと『原爆ドーム』という名の建物ではなかった」ということを聞きました。その言葉が強く印象に残っています。原爆ドームは、原爆が投下される前は産業奨励館という建物で、手回しオルガンやステンドグラスがあったところだと聞きました。

あのときたった一瞬で、今まであった、家族と一緒に過ごせ、友人と遊び、仲間と勉強できるような生活がなくなり、大切な家族や友人を亡くした悲しみや原爆による体の苦しみに変わってしまいました。今、私たちが楽しく過ごせている日々も、当時はなくなってしまったことを感じ、今、楽しく過ごせている日々をずっとつないでいかなければならないことに気づきました。

また、ひろしま子ども平和の集いへ参加し、中学生、高校生たちの平和への取り組みの発表を聞きました。私と同世代の人が自ら平和への取り組みをしていることを知り、みんなが平和への強い思いを持っていることに心を動かされました。

この事業を通して感じたことは、自分たちの手で何かしていくことが平和をつくる一つのピースになるということです。

しかし、平和の実現にあまり関心のない人や、誰かが平和を実現するだろう、してくれるだろうと思っている人もいるかもしれません。このような考えに対して、私は、世界全体での平和は一つの国だけではつくることができないということと同じで、みんなが協力して少しずつでも前に進んでいくことが大事だと考えます。そのため、未来の平和を築き、みんなが笑顔になれるようにするためには、まず一人一人が過去を知り、平和の大切さに気づいていくことがみんなにとってできることだと思います。

これから、私は平和特派員のメンバーと共に、戦争を知らない同世代の人や私よりも小さい子どもを含めた多くの人に、この広島で学び、感じた戦争や被爆の実相を伝えていきたいです。そして、より多くの人と一緒に、未来の平和を考え、いまだこの地球に残る武力から苦しむ人々を助けたり、そのようなことが起こる現状を変えたりするためにはどのようなことができるのかということにも掘り下げていきたいです。

# 平和な世界にむけて

みやた しゅういちろう  
宮田 周一郎(中学1年生)



私は初めて広島を訪れました。平和記念公園はとても広く、ここはかつて繁華街で、それが一瞬にして吹き飛んでしまったことを知り、原爆の威力を想像して怖くなりました。3 日間の平和活動の中で、特に心に残ったことを、以下に3つあげます。

## ① 原爆で多くの子どもが亡くなったということ

平和記念資料館は原爆の被害についてわかる多くの資料がありました。特に印象に残っているのは、焼けてボロボロになった子供の服の展示です。その子供たちは建物疎開作業中に被爆してしまったそうです。また、お話を聞いた被爆者の梶本椒子さんは 13 歳の時、工場で飛行機の部品を作っている時に被爆したそうです。戦争のための仕事をしている最中にたくさんの子供達が亡くなったということを知ってショックでした。

## ② 平和に対する決意の強さ

平和記念公園では多くの慰霊碑や記念碑を見学しました。その中でも、私は原爆死没者慰霊碑に刻まれた「安らかに眠って下さい。過ちは繰り返させぬから」という言葉を見て、原爆被害にあった人たちの平和に対する決意を知りました。また、平和記念式典での広島県知事のスピーチに感動しました。知事は核抑止論が破綻していることを核保有国の指導者に訴えかけました。

このような広島の決意があるにもかかわらず、今、ウクライナでその過ちが繰り返されそうになっていることをとても怖く感じます。

## ③ 多くの国の人が平和に関心を持っていること

平和記念式典には世界 100 カ国以上からの参列があり、若者の参加もとても多かったことに驚きました。想像以上に多くの人が原爆や平和について関心を持っているのだと知りました。私は将来留学したいと考えているので、留学した時にこの広島で起きた悲惨なことと、今の復興した広島を伝えていけるようになりたいです。

以上の3つに絞って挙げましたが、他にも本川小学校訪問や福山市訪問などこの事業でしか体験できない貴重な経験ができました。

地震や水害、感染症に対する不安や恐れは多くの方がはっきりと感じていると思います。戦争や原爆についても同じように自分ごととして考えられたら良いと思います。私は知識としては原爆が恐ろしいことは知っていましたが、広島を訪問してそのことを心から理解できました。そのため、一人でも多くの方が広島の街や平和記念資料館に足を運び、原爆や平和のことをもっと学んでもらえれば良いと思いました。そのために、文京区平和特派員事業は今後も続いてほしいです。

私は、文京区の初代平和特派員として広島を訪問し、多くの貴重な体験や知らなかったことを学ぶことができました。この経験を踏まえて、学んだことをこれから出会う人たちに話し、共有していきたいと思います。また、同じ学びを共にした今回の平和特派員のメンバーと継続的に交流していきたいです。

# 被爆の地「ヒロシマ」

やぶき かほ  
矢吹 佳穂(中学2年生)



私は、今回の文京区平和特派員事業に参加して、平和の大切さを改めて考えることができました。

1 日目に平和記念公園を訪れた時、私は「平和記念公園って広くてきれいだな」と漠然と思ったのですが、ボランティアガイドさんから、元々は大勢の人が住んでいた住宅街だったのだけれど、原爆が落ち焼け野原になったため戦争の悲惨さを忘れないようにと整備され公園になった、との話を聞き、多くの命が失われた上に今があるのだ、ということを実感しました。

2 日目に平和記念式典に参列した時は、とてもたくさんの方が参列していて、私が思っていた以上に大勢の人が平和について真剣に考えているのだなと思いました。

また、平和宣言の中でガンジーの「非暴力は人間に与えられた最大の武器であり、人間が発明した最大の武器よりも強い力を持つ」という言葉が引用されていたのですが、今こそ、この言葉をしっかりと考えなければいけないのだなと思いました。今でも世界では争いが起きていて、核を盾に威嚇をしている国もありますが、決して原爆による悲劇を繰り返してはいけないんだ、と強く思いました。

ひろしま子ども平和の集いでは被爆者の方から、「原爆が落ちた後の市内でとてつもない数の死体を目にした時、友人は、初めのうちは泣き叫んでいたのだけれど、しばらくすると何も感じなくなってしまったのか泣き止んだ」との話を聞いた時には、「何も感じなくなる」という状態にまで追い込まれてしまったことがとても恐ろしいと思い、今後は二度とそのような状態になってしまうほどの状況になることだけは絶対に避けなければいけないなと思いました。

2泊3日という期間でたくさんを経験し、今ある「平和」がとても大切なものなのだということを改めて実感することができました。この貴重な経験を私だけのものとするのではなく、まずは身近な人と一緒に平和の大切さを改めて考え、伝えていき、今の平和がこれからも続いていくように平和への想いを繋げていきたいと思います。そして、いつの日か世界から核兵器がなくなり、核の悲劇が二度と起こらないようにしていきたいと思います。